

大下遺跡発掘調査報告

1984年3月

岡山県赤坂町教育委員会

序

低い丘陵地の連なりから成る赤坂町は1千余年の昔、高地を住み家としたのに始まるといわれる。

本町大屋の大下遺跡もその1つで、丘陵地南端の古墳時代の住居址及び弥生時代から中世の散布地からなっていて、先人たちが住みつくのによい場所を選んだものと思われていた。

農業構造改善事業は町の隅々までに及び山上の耕地も開発されるようになりました。以前から県の指導で、開発の時は調査の必要があるとされていた土器散布地の1部を、このたび調査することになりました。

この発掘調査を実施するにつきましては、県教育委員会のご指導とご支援を頂き、関係諸機関・地権者の皆様のご協力を頂きましたことに対し深甚の謝意を表するものであります。

また直接調査を担当下さいました県文化課職員並びに発掘に従事下さいました地元の方々に厚く御礼を申し上げます。

この発掘が本町歴史の解明に役立ち、文化財保護につながることを祈ってやみません。

昭和59年3月31日

岡山県赤坂町教育委員会

教育長 秋山太郎

例　　言

1. この報告は赤坂町教育委員会が実施した「土地改良総合整備事業に伴う発掘調査」の概要である。
2. 大下遺跡は赤磐郡赤坂町大字大屋に所在する。
3. 発掘調査は県教育庁文化課松本和男が担当し、1983年5月11日～28日まで実施した。
4. 発掘調査にあたっては、赤坂町役場、地権者等関係各位より絶大なる援助を受けた。特に発掘調査に従事していただいた下記の方々には大変にお世話になりました。記して謝意を表します。

行正 一義 藤井 半孝 谷口 忠義
谷国 富太 片岡 鈴子 行正 富子

5. 遺物整理は県文化課分室において松本が行った。

なお、出土遺物は赤坂町教育委員会に、実測図、写真等は文化課分室（岡山市西古松）において保管している。

6. 本報告書の執筆、編集は松本が行った。
7. 本書に使用したレベル高は海拔高である。方位は第1、2図が真北である。
8. 本書第2図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（和気、周匝）を複製したものである。

目 次

序

例 言

本文目次

1	遺跡の位置、歴史的環境	1
2	調査の経緯	1
3	調査の概要	3
4	まとめ	6

図 目 次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	大下遺跡周辺遺跡図 (50,000分の1)	2
第3図	大下遺跡トレンチ設定図	3
第4図	T-1 内遺構全体図及び土層断面図 ($S = \frac{1}{50}$)	4
第5図	住居址平、断面図 ($S = \frac{1}{50}$)	4
第6図	住居址内出土遺物 ($S = \frac{1}{5}$)	5
第7図	造成土層内出土遺物 ($S = \frac{1}{5}$)	5

図 版 目 次

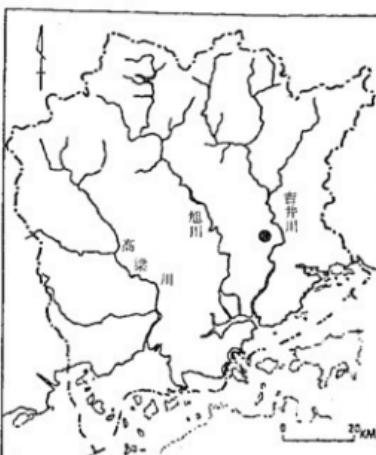
図版 1-(1)	遺跡遠景 (南東から)
(2)	T-1 土層断面 (南西から)
(3)	住居址全景 (南西から)
図版 2-(1)	住居址内遺物出土状態
(2)	住居址発掘調査風景
(3)-(5)	住居址内出土遺物写真

1. 遺跡の位置、歴史的環境

大下遺跡の所在する赤磐郡赤坂町大字大屋字大下は赤磐郡のほぼ中央部に位置する。遺跡は標高約200~400mの吉備高原の南端部にあたり、周囲の丘陵は開墾された畑や小溜池灌漑による棚田が形成されている。遺物は北から南に張り出す丘陵の南端部一帯に散在するが、今回、調査対象とした範囲は谷に接する丘陵縁辺部のみである。

大下遺跡を中心とした赤坂町、佐伯町に所在する遺跡のほとんどは丘陵尾根、端部に認められる。弥生~古墳時代の集落址は4遺跡（遺跡番号No. 8, 11, 42, 44）しか発見されていないが、その規模、時期等は不明である。遺跡は今後ますます増加するものと思われる。古墳は砂川流域とその支流を望む丘陵尾根上に数多く認められるが、西脇部一帯、酌田の古墳（遺跡番号No. 14~23, 36, 37, 68）などは古式古墳と考えられるが、その中でも砂川流域を見下す丘陵に立地する全長約36mの前方後円墳、荒神鼻古墳は卓越しており、この隣定された地域における首長墓として存在したものと理解される古墳であろう。

後期古墳は内部主体が横穴式石室をもつものであり、陶棺の出土を伝える古墳も存在する。（遺跡番号No. 5, 6）このように、遺跡の圧倒的多数が古墳時代後期のものであることから、この地域は古墳時代後期に最も開拓が進められたことを示しているといえよう。



第1図 遺跡位置図

2. 調査の経緯

大下遺跡は赤坂町の遺跡台帳に記載されている周知の遺跡である。（註1）赤坂町大屋一帯の県営圃場整備事業を実施するにあたって、東備地方振興局から昭和55年3月に埋蔵文化財の有無について照会があったため、県文化課、町教育委員会とで再度分布調査を実施した。

当遺跡は昭和初期に水田造成を行った時に大量の土器片が出土したと伝えられ、かつ表面採集が可能であったことから、関係当局と協議した結果、遺構の確認調査後、再度協議すること

になった。その後当該事業の一部が町営の「土地改良総合整備事業」に変更されたため、再度協議を行った。協議の結果、切り土工法区域のみを確認調査し、遺構が検出された地区のみ拡張して発掘調査することになった。

調査は昭和58年5月11日～28日まで実施し、6月1日には赤坂町歴史研究会一行及び地区の人々を対象として現地見学会が行われた。

註

(註1) 岡山県教育委員会「岡山県遺跡地図第5分冊」昭和53年3月刊



第2図 大下道跡周辺遺跡図 ($S = 1/50,000$)

- | | | | |
|------------------|-----------------|-----------------|------------------|
| 1. 大下道跡 | 27. 足新古墳 | 44. 岡の坂遺跡 | 58~60. 宮の奥1~3号墳 |
| 2. 天神鼻遺跡 | 28. 29. 大門1、2号墳 | 45. 茶臼古墳 | 61. 寺坂古墳 |
| 3. 4. 石井池1、2号墳 | 30~32. 出屋1~3号墳 | 46. 梅板古墳 | 62. 稲荷山古墳 |
| 5. 坂古墳 | 33. 天神古墳 | 47. 八幡吉古墳 | 63. 天神山下古墳 |
| 6. 7. 三佐古1、2号墳 | 34. 井の奥古墳 | 48. 太郎五郎古墳 | 64~67. 中の佐古1~4号墳 |
| 8. 高田遺跡 | 25. 安岡古墳 | 49. 50. 片山1、2号墳 | 68. 上池上古墳 |
| 9. 10. 高田1、2号墳 | 36. 37. 香谷1、2号墳 | 51. 燒尾1号墳 | 69. 王子古墳 |
| 11. 上林遺跡 | 38~40. 煙畠1~3号墳 | 52. 八幡宮上古墳 | 70. 71. 金子池1、2号墳 |
| 12. 13. 光谷1、2号墳 | 41. 野賀古墳 | 53. 二宮積石塚 | |
| 14~23. 多賀社1~10号墳 | 42. 芥川古墳 | 54. 山田上古墳 | |
| 24~26. 忍崎1~3号墳 | 43. 芥川古墳 | 55~57. 塙奥1~3号墳 | |

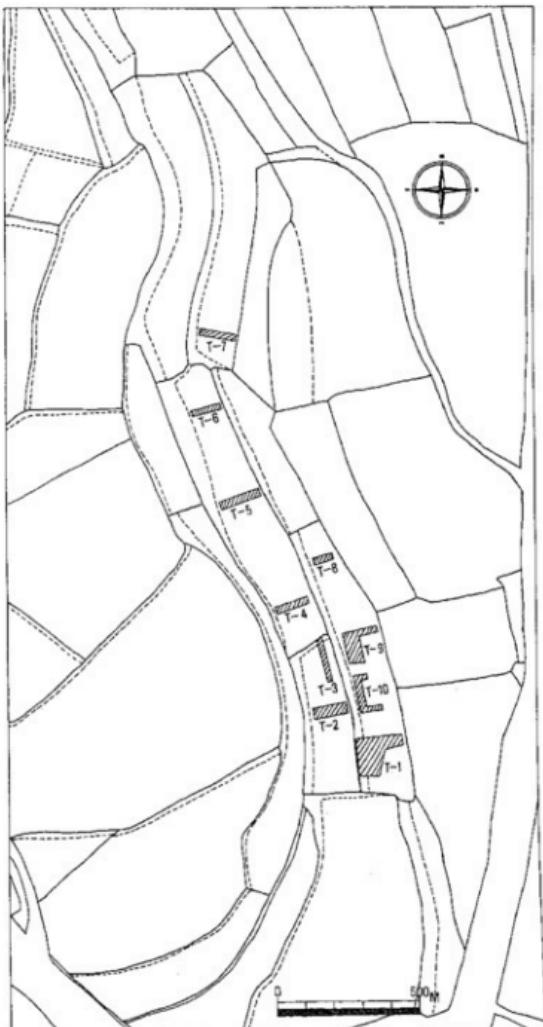
3. 調査の概要

調査はトレンチ方式で実施した。トレンチの位置は地形観察などによって、圃場整備実施予定範囲に10ヶ所設定した。そして、遺構の検出された地区や遺物が出土がみられたトレンチは拡張して調査を実施している。

調査の結果、T-2~10までは表土層を除去すると茶褐色、黒褐色の造成土層が南に厚く堆積しており、昭和初期に水田造成していたことを再度確認することができた。これらのトレンチでは遺構が検出されなかったが、造成土層内には弥生時代後期の土器、土師器等の出土がみられたことから、圃場整備対象外の高位部には遺跡が存在すると考えられる。T-1では住居址、溝、柱穴等を検出したため、拡張して調査を実施した。

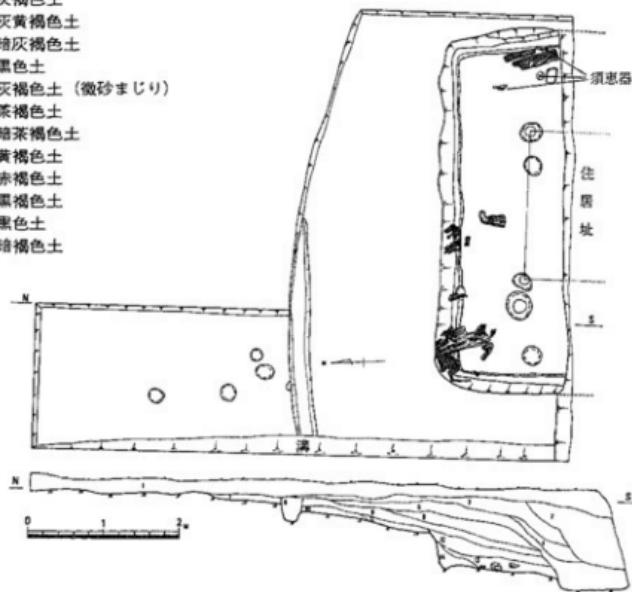
住居址（第4～6図）

1辺が5mの方形プランを呈する住居址であるが、

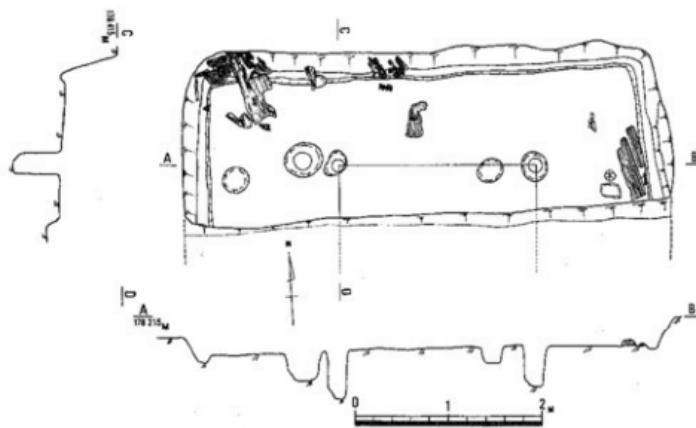


第3図 大下遺跡トレンチ設定図 (S = 1/2,000)

- 耕作土
- 暗黄褐色土
- 灰褐色土
- 灰黄褐色土
- 暗灰褐色土
- 黑色土
- 灰褐色土(微砂まじり)
- 茶褐色土
- 暗茶褐色土
- 黃褐色土
- 赤褐色土
- 黑褐色土
- 黑色土
- 暗褐色土

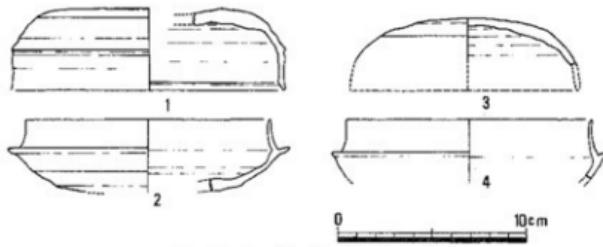


第4図 T-1内造構全体図及び土層断面図 ($S = 1/80$)

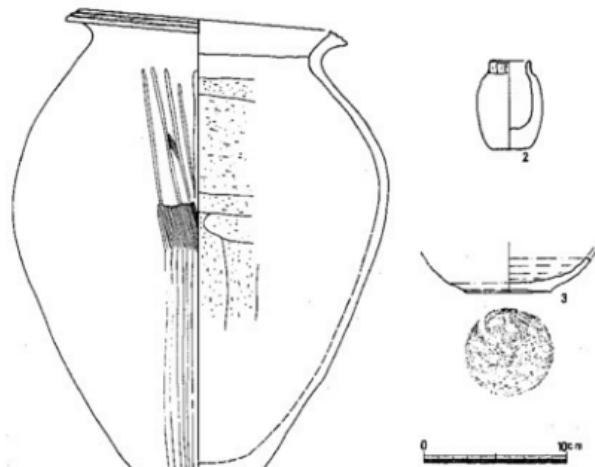


第5図 住居址平・断面図 ($S = 1/60$)

南側部分が水田造成のため約2/3程削平されていた。住居址の壁高は北側では床面から約50cmあり、周辺には幅約10cm、深さ約3~5cmの壁帶溝がめぐっている。柱穴は5本検出されたが、柱間は210cmの4本柱と考えられる住居址である。なお、床面、壁部分に炭化材がみられることから、この住居址は火災にあったものと考えられる。遺物は床面に付着した状態で須恵器（杯身、蓋）が出土している。（第6図）1は推定口径14.6cmを測る杯蓋で、色調は暗灰青色を呈している。2は推定口径13cmを測る杯身で、色調は1と同様に暗灰青色を呈する。なお、この1と2とはセットになる。3は灰色を呈する杯蓋である。4は推定口径13.2cmを測る杯身で、色調は灰色を呈する。3、4とも焼成が甘い。これらの遺物からみて、6世紀前葉の住居址と考えられる。



第6図 住居址内出土遺物 (S=1/3)



第7図 造成土層内出土遺物 (S=1/4)

溝

住居址の北で検出されている。幅約30cm、深さ約20cmを測るが、東では消滅している。溝内からは弥生時代後期の土器が出土している。住居址に関連する遺構と思われたが、土層断面の観察結果、昭和初期と推察される造成土層から切り込まれているため、現代溝と考えられる。

柱穴

直徑約20cm、深さ15~24cmを測る柱穴が4個検出されたが、出土遺物が無いため時期は不明である。

造成土層内出土土器（第7図）

造成土層内から弥生時代後期~近世までの遺物が細片となって出土したが、その中でも良好な状態で出土した土器を掲載した。1は口径18cm、器高32.5cmを測る。口縁端部には3条の浅い凹線が左回りで施されているが、最後は2条となり完結していない。体部外面はハケナデの後、ヘラミガキが、内面にはヘラケズリが行われている。底部はやや上げ底である。色調は茶褐色を呈している。弥生時代後期前葉の土器である。2は口径2.8cm、器高6.3cmを測る弥生時代後期のミニチュア土器である。頸部外面には指頭押え痕が認められる。3は色調が灰白色を呈する中世の須恵器碗である。底部には糸切りがみられる。

4.まとめ

今回の調査で弥生時代後期~近世までの遺物が出土したが、遺構は前述の通りである。今回調査地点が遺跡の中心部ではなかったため、検出された遺構は少なかったが、古墳時代の住居址を確認できたことは大きな成果であった。

後期古墳の立地が砂川流域とその支流を見下す丘陵部に圧倒的に認められることから、古墳時代には平野、谷部一帯を急速に開拓していったことが予想される一方で、標高約200m以上の高地にも後期古墳が築造されている事実は（同時期ではないが）本遺跡で確認されたような集落が存在することによっても理解されよう。

なお、弥生時代後期の遺構は検出されなかつたが、本遺跡の北側には集落址が予想される。

図版 1



(1) 遺跡遠景（南東から）



(2) T-1 土層断面（南西から）



(3) 住居址全景（南西から）

図版 2

(1) 住居址内遺物出土状態



(2) 住居址発掘調査風景



(3) - (5) 住居址内出土遺物写真



(3)



(4)



(5)

大下遺跡発掘調査報告書

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月30日 発行

発行 岡山県赤坂町教育委員会

